



次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(1) 勇二郎は、かき氷屋の前を行ったりきたりしています。

「どうしようかな。なやむなあ。」

目の前の行列と、自分のカバンを見比べます。

カバンの中には、おごづかいが五百円入っています。今なら、かき氷の一つくらい、十分買うことができます。

「食べたいなあ。暑いしなあ。買っちゃおうかな。」

夕方になったとはいえ、まだ昼間の暑さが残っています。

「でも、もったいない気もするんだよな。何かほしいものができるかもしれないし。」

勇二郎はうで組みをして考えます。

10

問 「勇二郎は、かき氷屋の前を行ったりきたりしています」とありますが、このときの勇二郎の気持ちの説明した次の文の [] にあてはまる言葉を、本文中からぬき出しなさい。(十点×4)

① [] のでかき氷を [] のだが、お金

② []

③ [] が ような気もして、どうするか決

④ [] められずに [] 気持ち。

5

(2) 朝起きると、熱が三十八度もありました。

「学校は、お休みしなさい。」

お母さんに言われましたが、ひばりは首を横にふります。

「今日は、全校集会があるの。それに、給食、カレーの日だもん。」

「カレーくらい、熱が下がったら、お母さんが作ってあげるわよ。それに、スピーチだって、副会長に代わってもらったりできるでしょう?」

あきれ顔で、お母さんが言います。

「体のほうが大事よ。休みなさい。」

「児童会長の仕事だって大事だよ。熱がある以外は元気だし、副会長にめいわくをかけたくないの。」

ひばりはがんこに言い張ります。

10

問 「ひばりは首を横にふります」とありますが、ひばりはなぜ学校を休みたくないのですか。その理由を説明した次の文の [] にあてはまる言葉を、本文中からぬき出しなさい。(十五点×4)

① [] があり、 [] とし

② []

③ [] をしなければならなし、給食に []

④ [] が出る日だから。

場面 (1)

◎今日のポイント

登場人物の心の中を表す部分は、登場人物や、文末表現の

に注目してさがす。

(例) たかしは悲しかったのです。だれもぼくをわかってくれない。
そこで、たかしは親友を求めて、長い長い旅に出たのでした。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「なんだ、子どもたちの遊びごとか。」

と、かしらのはりあいぐぬけていいました。

「遊びごとにしても、盗人ぬすびとごっこはよくない遊びだ。いまどきの子どもはろくなことをしなくなった。あれじゃ、^①さきが思いやられる。」

じぶんが盗人のくせに、かしらはそんなひとりごとをいいながら、また草の中にねころがろうとしたのでありました。そのときうしろから、

「おじさん。」

と声をかけられました。ふりかえって見ると、七歳さいくらいの子、かわいらしい男の子が牛の子をつれて立っていました。顔だちの品のいいところや、手足の白いところを見ると、百姓ひやしやうの子ともとは思われません。旦那衆だんなしやうの坊ちゃんぼっちゃんが、
※下男したなんについて野遊びのあそびに来て、下男にせがんで子牛こぎうを持たせてもらったのかも知れません。だがおかしいのは、遠くへでもいく人のように、白い小さい足に、

(1) この文章のおもな登場人物はだれですか。本文中から二人、ぬき出しなさい。
(十点×2)

(2) 「^①さきが思いやられる」の意味として最もよいものをア～エから選び、記号で答えなさい。
(十五点)

- ア しょう来が予想できない イ しょう来を考えたくない
ウ しょう来が心配である エ しょう来を楽しみにする

(3) 「^②口をもぐもぐやりました」とありますが、だれのどのような様子を表していますか。最もよいものをア～エから選び、記号で答えなさい。
(十五点)

- ア かしらの、言いたいことをうまく言葉にできない様子。
イ かしらの、うれしさのあまり、声も出なくなっている様子。
ウ 子どもの、早く牛をあずけて遊びにいきたがっている様子。
エ 子どもの、盗人をこわがらない、どうどうとしている様子。

得点

小さいわらじをはいていることでした。

「この牛、持っていてね。」

かしらが何もいわないさきに、子どもはそういつて、ついとそばにきて、赤い手綱たづなをかしらの手にあずけました。

かしらはそこで、何かいおうとして、口くちをもぐもぐやりましたが、まだいい出さないうちに子どもは、あちらの子どもたちのあとを追って走っていつてしまいました。あの子どもたちの仲間になるために、このわらじをはいた子どもはあとをも見ずにいつてしまいました。

ぼけんぼけんとしていつているあいだに牛の子を持たされてしまったかしらは、くつくつと笑いながら牛の子を見ました。

たいてい牛の子というものは、そこらをぴよんぴよんはねまわつて、持つていつるのがやっかいなものです。この牛の子はまたたいそう、ぬれたうるんだ大きな目を※しばたたきながら、かしらのそばに無心に立つていつてました。

「くつくつくつ。」

とかしらは、笑いが腹はらの中からこみあげてくるのが、とまりませんでした。

「これで、弟子でしたちに自慢じまんができるて。きさまたちがばかづらさげて、村の中を歩いていつるあいだに、わしはもう牛の子を一ぴき盗んだ、といつて。」

そしてまた、くつくつくつと笑いました。あんまり笑つたので、こんどはなみだが出てきました。

「ああ、おかしい。あんまり笑つたんでなみだが出てきやつた。」

ところが、そのなみだが、流れて流れてとまらないのであつりました。

「いや、はや、これはどうしたことだい、わしがなみだを流すなんて、これじや、まるで泣いてると同じじやないか。」

そうです。ほんとうに、盗人のかしらは泣いていつたのであつります。——④かし

35

30

25

20

15

(4) にあてはまる言葉として最もよいものをア～エから選び、記号で答えなさい。(十點)

- ア らんぼうで
- イ にぎやかで
- ウ やかましく
- エ おとなしく

(5) 「③弟子でしたちに自慢じまんができるて」とありますが、かしらはどのようなことを「自慢じまんできる」と言つていつるのですか。本文中の言葉を使つて書きなさい。(二十點)

(6) ☆ 「④かしらはうれしかつたのです」とあつりますが、かしらが昔と今をくらべて「じぶん」のことを考へた内容を表していつる部分の初めと終わりの五字づつをぬき出しなさい。(句読点も字数にふくめます)。(十點×2)

らはうれしかったのです。じぶんは今まで、人からつめたい目でばかり見られてきました。じぶんが通ると、人々はそらへんなやつがきたといわんばかりに、まどをしめたり、すだれをおろしたりしました。じぶんが声をかけると、笑いながら話しあっていた人たちも、きゆうに仕事のことを思い出したように向こうをむいてしまうのでありました。池の面おもてにうかんでいる鯉こいでさえも、じぶんが岸に立つと、がばつとからだをひるがえしてしずんでいくのでありました。あるとき※さる猿さるまわしの背せなか中に負おわれている猿に、かきの実をくれてやったら、一口も食くわずに地べたにすててしまいました。みんながじぶんをきらっていたのです。みんながじぶんを信用してはくれなかったのです。ところが、このわらじをはいた子どもは、盗人であるじぶんに牛の子をあずけてくれました。じぶんをいい人間であると思ってくれたのでした。またこの子牛も、じぶんをちつともいやがらず、おとなしくしております。じぶんが母牛でもあるかのよう50に、そばにすりよっています。子どもも子牛も、じぶんを信用しているのです。こんなことは、盗人のじぶんには、はじめてのことです。人に信用されるというのは、何といううれしいことでありましょう。

(新美南吉「花のき村と盗人たち」による)

(注) 一部、表記を変えてあります。

※下男…やとわれて雑用をする男。

※しばたたく…しきりにまばたきをする。

※猿まわし…猿に芸をさせて金銭きんせんをもらう大道芸。また、それを職業にする人。

👑 チャレンジ問題

この文章の「かしら」に手紙を書きなさい。

復習問題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

かおるはとぼとぼ歩きました。そして家についてから、かばんにむすびつけてあった銅でてきた小さなねこがなくなっているのに気がついて、どきっとしました。

手さげかばんには、黄色いひもだけが残っていて、その先にむすびつけてあったかわいいうちっぽけなねこは、かげもかたちもなくなっていたのです。

かおるはすぐに、おばあさんの家の前から逃げてきたときのことを思い出しました。つつじの木に手さげかばんをひっかけたときに、ねこがひもからちぎれたのにちがいないのです。

おばあさんが大きな声で、「お待ちよ、これっ、お待ちよ……」といったのは、もしかしたら、ちぎれてとんだねこを見てよびとめたのかもしれない。そうだとしたら、もうわたしのところにねこはもどってこないわ。あんなふうにして逃げてきてしまったんだもの、小さなねこのかざりがなかったかなんてきにいけないじゃないの。

かおるは、つめたくてすべすべした銅のちびねこのまるい背中を思い出していました。

たしか、五歳の誕生日におとうさんとおかあさんからもらって、ずっとたいてつにきてきたねこです。幼稚園のときからかばんにぶらさげて、それこそ夏でも冬でもいっしょだったのです。いじわるな男の子にねらわれたり、なくしかれたり、何度もあぶないめにあったのですが、五年生になるまでずっといっしょにいられたのです。

それなのに、なんということでしょう。あんなことで、たいせつなおまもりをなくしてしまうなんて！

- (1) ☆ おばあさんの家の前から逃げてきたときのことについて、かおるが考えた内容を表している一つの段落の初めと終わりの六字ずつをぬき出しなさい。(句読点も字数にふくめます。)

↳

- (2) 「たいせつなおまもり」とありますが、なぜかおるは、銅製の小さなねこのかざりを「おまもり」だと思っているのですか。その理由として最もよいものをア～エから選び、記号で答えなさい。
- ア 両親がくれたものだったから。
 イ ふしぎな力をもっていたから。
 ウ 黄色いひもがついていたから。
 エ 神社で買ってきたものだったから。

--

- (3) にあてはまる言葉を、本文中から四字でぬき出しなさい。

20

15

10

5

あれはふしぎな力をもっていたのです。運動会の朝に、した背中をなでて出かけると、かけっこは一等になることができました。あのねこをもらったばかりのころ、るすばんをしてさびしくなると、「おかあさん、おかあさん、早く帰ってきて。」といいながら背中をなでてみると、すぐにおかあさんが帰ってきました。

かおるは悲しい気持ちで、しばらく、銅のねこといっしょだったころのことをいろいろ思い出していました。そして、どうしたってもう一度、あのねこにもどってきてほしいと思いました。

でも、^②そのためにはあの家に出かけて、もう一度あのおばあさんに会わなくてはならないのです。それを考えると、気持ちが重くなって、なにをするのもいやになってしまいました。

宿題をすませてピアノの先生のところへ行っても、まったくうわの空でした。
^③じぶんでひいている曲が、だれか勝手にピアノをたたいて音をだしているよ
 うで、早く終わればいいのと思っていました。

(征矢清「かおるが見つけた小さな家」による)

(注) 一部、表記を変えてあります。

(4) 「^②そのため」の指している内容として最もよいものをア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 運動会のかけっこで一等になるため。

イ おかあさんに早く帰ってきてもらうため。

ウ もう一度、ねこにもどってきてもらうため。

エ ねこといっしょだったころのことを思い出すため。

(5) 「^③じぶんでひいている曲が、だれか勝手にピアノをたたいて音をだしているよ」
 うで」とありますが、かおるのどのような様子を表していますか。本文中から四字でぬき出なさい。

保護者印

教師印